

いて、その話を聞くのが面白いです（確か、大男が川に架かっている橋を揺らす、という国がありました）。

4. 千尋が両親とともに興味本位で入った街

千尋のお父さんが説明していますが、作品のはじめの方で、バブル時代に作られたテーマパークが朽ち果てている場面が現れます。この場面から日本のバブル経済のことを説明してくれる学生がいると、「経済のことまで学べるなんて、とてもお得な映画だな。」と思います。

他にも畳の部屋や、千や風呂屋の従業員が着ている服、建物の様子、街並みなど、日本の文化や風景を知るのに、多くの情報が詰まっていると思います。

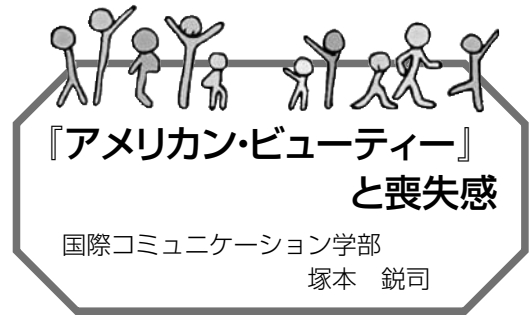
以上が、留学生が日本文化を学び、考えるのに良い映画だなと思う理由でした。

最後に、私が留学生に聞かれて、答えに詰まった質問をいくつか挙げておきます。みなさんが留学生に聞かれたら、何と答えますか？ 調べると答えがわかるものもあるので、興味がある方は調べてみてくださいね。

Q: 千尋は10歳とのことだが、少し子供っぽすぎやしないか？ / 千は10歳とのことだが、とても勇敢だと思う。自分の国の10歳の子供は一人では何もできないが、日本人の子供はみんな、あれほどまでに勇敢なのか？

Q: 鳥居の赤には魔除けの意味があると聞いたが、冒頭の引っ越し先に向かうシーンに出てきた鳥居は、なぜ赤に塗られていないのか？

Q: 食べ物屋でお父さんが一番初めに貪り食べていた食べ物は何か？ おいしそうだから食べてみたい。



『アメリカン・ビューティー』は、それまでイギリスやアメリカで舞台の演出を手がけていたサム・メンデスが、1999年に初めて監督した映画作品である。この作品はアメリカの中流階級の白人家族のあり方や彼らの価値観をうまく描写している。1990年代中頃までは、アメリカの白人は肌の色を持たない、人間の原型のような存在として扱われた。しかしながら、1990年代中頃以降から、白人であることはアメリカ社会において重要な意味を持つとの考え方が広まった。そんな文化的環境の変化が起こっている時期に制作されたのが、『アメリカン・ビューティー』である。

都市の郊外に住むレスター・バーナムは、四十二歳で広告会社に勤めていて、中流階級に属している。彼の妻であるキャロリンは不動産業をしており、家を売るのがに死だ。彼ら夫婦にはジェーンという高校生の娘がいるが、彼女は両親に対して距離を置いている。ジェーンは、父と母が仲が悪いのにもかかわらず、娘に対して良き両親を演じているのが鼻持ちならない。ある日、ジェーンの通う高校で、バスケットボールの試合が行われ、ジェーンはその試合のハーフ・タイムにチア・リーダーとして踊ることになっている。母であるキャロリンは、夫のレスターを誘い、高校に行く。ハーフ・タイム・ショーが始まる直前に、彼らは高校の体育館に着く。幸い、ジェーンがコートで踊っているところを観ることができたが、レスターはジェーンと一緒にコートで踊っているアンジェラに魅了されてしまう。彼はアンジェラが胸元からバラの花びらを跳び散らかすかのような妄想を抱く。レスターは心の空虚さを埋めるために、若

い女性に対して妄想を膨らませる。

バスケットボールの試合のあと、レスターとキャロリンは、娘のジェーンに体育館の出口で会うが、レスターはジェーンと一緒に出てきたアンジェラに高揚した声で早口に話しかける。「家まで送ってあげようか」とレスターが言うと、「車があるから大丈夫」とアンジェラが答える。そして彼は、「娘のジェーンの友達は、私の友達だ」と宣言する。両親が去ったあと、ジェーンは「もうこれ以上の惨めさはありません」とレスターについて愚痴を言うと、アンジェラは「お父さんは感じのいい人」と切り返す。娘にとってレスターという父は、理解不能な変態のおじさんでしかないが、アンジェラにとって彼は、自分の前では胸をドキドキさせて恥ずかしそうに話す少年とうつつようだ。

その後、アンジェラがジェーンの部屋に泊まりに来たとき、レスターはジェーンの部屋の扉に耳をあて、アンジェラとジェーンの会話を盗み聞きする。そのとき、アンジェラは「もしあなたのお父さんが胸と腕を鍛え上げたなら、男女の関係になってもいい」と打ち明ける。ジェーンは「気持ち悪い」とその考えを拒絶する。レスターはアンジェラの一言で、俄然若さを取り戻そうと、家の周りをジョギングしたり、家の車庫でバーベルを使って筋力トレーニングを始める。

四十二歳のレスターが、高校生の娘の友人に恋愛感情を抱き、妄想を膨らませて、若さを取り戻そうとするのは、心の中にある空虚を埋めるためだ。若さへの渴望は四十代であっても衰えることはない、とレスターは信じる。何歳になっても、若さを追求し体現しようとするのがよいという価値観が、中流階級の白人の中にあると思う。

視点を妻のキャロリンに移そう。彼女は仕事において上昇志向が強い。しかし、彼女は不動産の物件を売ることに四苦八苦している。そんなとき、彼女は仕事関係のパーティーで、同じ不動産業を営むバディー・ケインと出逢う。彼は優秀な事業家で、キャロリンが望むものをす

でに手に入れている。キャロリンにとっては憧れの存在であり、広告会社を首になった夫のレスターとは大違いである。バディーはある日、キャロリンと密会をして、妻と別居したと報告する。キャロリンもこのときすでにレスターとの夫婦の絆は切れていて、これで二人の間の壁はなくなり、男女関係に発展する。

レスターとキャロリンの夫婦のあり方は、アメリカの中流階級の白人では珍しくない。キャロリンを演じたアーネット・ベニングは、インタビューの中で、「自分が演じた役は親しみがあり、映画の中だけではなく、日常生活でもよくあることだ」と言っている。夫婦関係が崩壊していて、それぞれが気になる、もしくは親密な異性がいるのが普通の状態というわけだ。もちろん、そのような崩れかけた夫婦関係において、それぞれ自分たちの関係性に意味があるかどうか、疑問を持つに違いない。また娘のジェーンはこの崩壊しかけた家族の中では孤立していて、安心できる場所がない。そのような言葉にならない疑問や不安を俳優たちが演技を通して上手に表現しているのが、この映画の面白いところだと思う。



「アメリカ・インディアン」あるいは「アメリカ先住民」と聞いたら、あなたはまず何を想像するだろうか？ 名古屋に沢山の店舗を構えるインディアンズステーキハウス？ 店舗入り口には、長髪に羽飾りをつけて上半身裸の男性の人形がお目見えする。アメリカ先住民の研究をしている身としては、このステーキハウスの「インディアン」という表象の使い方に色々と文句を申したいところではあるが、これは他のコラムでの議論に取っておくことにしたい。^{*1}